須賀川市教育研修センターだより　第 93 号

「 み ち 」

令和元年 12 月 20 日 発行

成長する児童生徒の姿

～できた喜び～

師走の候、各学校においては、通知表や保護者向けお便り作成などで、子どもたちの姿を改めて思い起こす時期であると思います。

教育研修センターでは今年度も多くの幼稚園や小・中学校に学級支援や学校支援として関わりをもたせていただきました。４月当初は新しい環境になじめず教室内を歩き回る子、学習準備ができずに廊下に出ている子、校門の前までは来るのだが、校門から中に入れない子等々、心配の多いスタートであったクラスもいくつか見られました。しかし、そんな子どもたちも学校生活に慣れ、自分の居場所ができてくると落ち着いて学習に参加できるようになってきたのではないでしょうか。

また、医療機関や福祉事業所と連携して、学校だけではなく、多職種の方々の見方から子どもたちをアセスメントすることで一歩進んだ方策がとれた学校も多いと思います。担任が一人で悩むことなく、子どもたちの問題をチームで考え、その方策について考えていくと問題解決への道が見つかるのではないかと感じます。

ある学校では、なかなか学習にとりかかれない A さんに対し、保護者との教育相談を繰り返しに行い、学習形態に個別の学習を取り入れ、さらに医療機関との連携を図り落ち着いて学習に参加できるようになりました。さらに、A さんに対する周りの友達の見方も変わり、今では４月のころは何だったのだろうと思うほど、A さんはできることが増えています。

また、担当する先生方の関わりの工夫で子どもの様子が変わった例もありました。過度な称賛をやめ、共感や受容の発言を多く取り入れることで、今までできなかったことが抵抗なくできるようになったという報告もありました。好き嫌いのある子どもが、苦手なものを口にした際、「うわー、頑張ったね～。すごいね～。」よりも、「おいしいね～。」「ふわふわするね～。」等に変えたところ、箸をつける回数が増え、知らず知らずのうちに口にするようになっていたという例もありました。

できなかったことができるようになった
できなかったことにチャレンジするようになった
学びあう仲間ができた　等々
そんな子どもたちでいっぱいにしていきたいと思います。

ま さ か !?

「ケーキの切れない非行少年たち」
～宮口幸治　著～

ベストセラーになった書籍なので、すでに読まれている先生方も多いと思います。著者は法務次官の経験を持つ精神科医です。

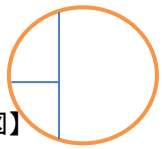
タイトルに驚き、手にするとそこには少年院に入所している凶悪犯罪に手を染めた少年たちに「ケーキを３等分してください。」といって丸いケーキを出すと下記の A 図のように切ってしまう子がいるというのです。

食べるものがない時どうしますか？と問えば、「コンビニに行ってもってきます。」と答える子どもたち。

その原因は、子どもたちの認知機能の弱さにあると著者は言っています。そのために物事の判断が難しく、反省や謝罪のできにくい状況におかれ、社会への生きにくさが生まれてきたのだと書かれています。さらに、そんな子どもたちは普通の小学校や中学校にも潜んでいるというのです。

加えて、そのような子どもたちが、どのようにして更生していくのかについても書かれています。

子どもたちの心の中を覗いてみてはいかがでしょうか。



【A 図】

人が人を育て、一人も疎かにしない教育

上記タイトルは、2015 年 3 月に行われた第 5 回「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞で厚生労働大臣賞を受賞した会社の理念です。

F 市にある、この会社は従業員の多くが障がいを抱えた人、または高齢者です。その会社では、障がいをもった人、女性、高齢者を雇用することは義務感ではなく、自然のことだったと言います。『障がい者の中には障がい者の優れた特性があり、単純作業でも集中することができ遅刻欠勤が極端に少ない。ある年の無遅刻無欠勤で表彰された 12 名のうちの 10 名は障がい者でその人たちは健常者の模範になっています。』ということです。

また、社員の A さんは時間をかけて正確に仕事をこなそうとする性格でしたが、入社当初は健常者の 5 割程度の能力だったため、教える側も教わる側も血のにじむような努力を重ね、一年後にどうにか仕事をこなせるようになりました。しかし、時間がたつと集中力が切れてきてしまい、再度技術指導が必要となり、それでも A さんは根気強くついていったそうです。その姿に会社の会長は A さんの可能性に期待感をもつようになったということです。

「働く障がい者から学んだ美しい心は、私共の人生も変えて、人が人を育て、一人も疎かにしない教育の大切さを教えられ、今やその考えが会社内にしっかりと根を下ろしていることが何よりありがたいことです。」と会長は結んでいます。

私たちが取り組んでいる学校教育も同様です。通常学級であろうと支援学級であろうと、すべての子どもたちの学ぶ権利を保障しなければならないことに変わりはありません。

「子どもの学ぶ権利を一人残らず保障し、子どもが一人残らず夢中になって学ぶ」学校づくりに努めなければならないとこのエッセイを読んで感じました。

冬の寒さが春の彩りをはこぶ

教育研修センター正面玄関のプランターの花がかわりました。

これまで、夏の暑さに耐えてセンターの玄関を装っていたガザニアにかわり、白、紫、黄色のビオラがお目見えしました。ビオラはヨーロッパ、西アジアが原産国とされており、秋から春にかけて咲くかわいらしい花です。花言葉は「忠実」「誠実」「信頼」などで、楚々として咲く可憐な様相からその言葉が連想されます。どんな花との相性も良く、寄せ植えにも欠かせません。

しかし、そんな可憐な花も冬の厳しい寒さを通らなければ春の庭先を彩ることはできないのだというのです。そのために 11 月に植え、冬の寒さを経験させるのだと庭師の方からお聞きしたことがあります。

センター前のビオラの株は、今はまだまだ小さな株ですが、春には大きな株となって皆様をお迎えできるものと思っています。